九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『翡翠軒』残本考

阿部, 泰記
山口大学 : 助教授 : 中国古典文学

https://doi.org/10.15017/9737

出版情報：中国文学論集. 14, pp.78-109, 1985-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『翡翠軒』殘本考

阿部泰記

一

阿英が發見した『清平山堂話本』殘本二種は後に鄭振鐸に贈られ、[1] 現在北京圖書館に所藏されている。ところでその一種『梅杏爭春』については殘存五葉の全文が阿英によって已に紹介されているが、殘る一種『翡翠軒』[2]については殘葉が三十片以上に及ぶせいか、阿英は左のような梗概しか記していない。

これら大小の殘片を總合すると、『翡翠軒』は元の至正年間のことであることがわかる。浙江臨安府錢塘縣の擧人諸葛章は母命を奉じて蘇州の舅を訪ね、舅の娘汪嬋英が好きになる。……二人は互いに一目惚れしてしまい、七夕の夜裏庭で出會った時……、すっかり意氣投合して暗に相手の氣持を知った。女は思いが募り、戀文を婢楚蓮に託して男に贈る。男も女の扇に詩を題して返す。かくて女は卓文君の驅落ちに效い、二人は月に誓

って秘かに夫婦となる。だが男は母が病氣のため杭州へ歸らねばならず、二人は悲しく別れる。この間に女の父が娘を他家に嫁がせようとし、家庭に波亂が起きる。その後のことは殘片からはわからないが、後に諸葛章は狀元に及第して福建省大參に選ばれ、再度蘇州に來て女を尋ねる。多分前の緣談は女が拒絶して成立しなかったのであろう。愛し合う二人は最後には結ばれる。

だがこの梗概も簡略に過ぎ且つ誤りが多い。その上北京圖書館藏本は前後を檢討せず亂暴に殘片を貼り並べたものに過ぎず、ストーリーの把握は極めて困難である。本稿ではそこで殘葉を改めて整理し、この小說の內容を考察することにした。

二

北京圖書館藏『翡翠軒』『梅杏爭春』二種は縱31cm、橫15cm 大の書に裝丁されている。半葉十一行、行二十二字。板心に「翡翠軒」「梅杏爭春」と刻し、『翡翠軒』は第二、七、八、九、十一、十二、十四、十五、十七、十九、二十一、二十三丁、『梅杏爭春』は第三、五丁のみ丁數が判明し、丁數の不明なものはこれら丁數が明らかな殘片の間に組み込まれている。また各葉端は剪刀で截斷されている。ではこうした殘片整理は誰の手によって行なわれたのか。確かなことはわからないが、少なくとも阿英ではないことは彼の梗概とこの整理された殘片の順序が齟齬することから明白である。この書の冒頭第一葉は『翡翠軒』第二丁で、その上欄に「長樂鄭振鐸西諦藏書」朱印があり、鄭振鐸が未整理の殘片を阿英から受取って書物の體裁にしたことを明示している。鄭振鐸が殘片を現在の順

序に並べたにしては餘りにも見識がないように思われるが、鄭振鐸が誤ってこの小說の冒頭に第二丁の殘片を置いたことは事實である。故に鄭氏が阿英同樣この文言戀愛小說に興味が湧かず、仔細に目を通さずに暫時これらの殘片に裏打ちして書物としたのではないかと考えられる。ひとまず私の判斷によって殘葉を正しい順序に並べ變えると次のようになる。

1、甥留甥館於芙蓉軒軒前有□　　□　〔第一丁、裏?〕

其顏色或深或淺右有綠槐嫩柳□□□□□□□□內

列玩□內有紫金獸爐焚沉□之香兩壁掛美人□□□

2、　□□蛾眉兩相映　天邊塵世亦何分　〔第二丁、表第十行〕

其四幅弄花香滿衣

春園無處不芬芳　紅白花開逞艶粧

笑折一枝輕撚弄　不勝香氣透羅裳　〔同丁、裏第一行〕

次日道昂妻兄汪廷景故都御史汪浩之子也道昂

京赴試新到設席請甥幷妹與道昂赴宴叙禮廷景曰

妹之親卽吾親也勿以外人相待遂請妻幷女相見少

妻李氏見生有女嬋英年方二八聰明俊雅識字能文
指女工率皆精通有傾國之姿西施莫比英有侍女楚
亦伶俐通書英甚鍾愛之未嘗一刻離左右英帶楚蓮
中堂蘭麝馥郁環珮玎璫與生講兄妹之禮畢

〔第?丁、裏第一行〕

3、小姐□□奈□未□配耳生又曰人生□□□今英親未
偶乃大人之過也蓮曰豈大人之過也我小姐常言非大
丈夫俊雅者誓不相配爲此遲滯乃將手中紈扇示生曰
如此扇之花蜂蝶枉癡心意生遂借其扇視之畫牡丹一
枝生曰娘子言之極妙區區將此花一詠可否蓮曰最美
生乃揮筆賦一絶云

一枝壓倒衆芳菲　傾國姿容分外奇
獨倚董風矜絶色　謾教蜂蝶浪相窺

書畢將言誘蓮忽有一家人老王至蓮乃分別而歸造英
室以生詩與英視乃察其詩中之意遂暗綴五言一絶云

懶把娥眉掃　羞將粉臉匀

4、先生厚意有何心事但說妾以爲之生乃跪進裏面言小生斗膽聊有數字欲煩娘子寄與嬋英小姐達知肺之情未審娘子台意肯否蓮曰妾雖不及紅娘有怜□苦之心愿當與君爲之生作書與蓮曰大事□□□□

〔第六丁?、裏第八行〕

5、　　敢有忘乃送蓮

小生□□□望好音蓮別生而歸還思曰若小姐□□不語萬全之喜若有怒時伊告父母奈何乃口占一絕

戲煩崔府小紅娘　　俛首深深自忖量
傳遞一緘消息到　　粧前尤恐變朱顏

蓮暗忖曰生事非我可爲欲不與爲古人云靡不有初鮮克有終默然良久乃設一計潛脩春景詞一首藏於袖中逕造英房長吁而進英曰汝嘆息何也蓮卽誘之乃曰向者偶因春景甚是感懷錄得一詞已久今復覩之不由人不感傷英曰其詞安在蓮乃將詞與英視之

〔第七丁、表第一行〕

日融融草芊芊黃鶯求友啼林前柳條梟梟拖金線花
蕊茸茸簇錦毡□逐婦燕穿簾狂蜂浪蝶相翩翩春光
堪嘗還堪翫惱殺東風悞少年

〔同丁、裏第一行〕

英視畢乃曰撫明媚之景覽蟲蟻之戲而咨嗟非女子之
本分也蓮曰非也人生如朝露青春漸去不能再來故此
有感且如小姐年稍長成而虛度韶華枕席孤單聳聽良
久答曰男兒如銀瓶其身一破則可再聚復完女子如玉
壺其身一破則不可復完花放一春人生一世豈可配喬

6、

□殺襟病漸□無限傷春事在心共誰
□音□□□願結連枝比翼仍望回音
□詬□□□□□正教我反以邪言□
□□□是你□也不看平昔之面告知父母必絕汝

〔第八丁、表第八行〕

7、

□□書扯得粉碎蓮乃惶恐而退次日蓮往生軒謂生曰
大事休矣嬋英甚怒讀書扯破將我詬也生曰將如之何

〔同丁、裏第一行〕

望娘子可憐性命蓮曰君且莫愁當別圖之生曰全仗妙策感恩非淺言未畢忽有人至蓮急退生乃新愁轉添頓積春山英所拒者恐蓮心口不一自得書後容顏消減凡事怠爲忽間傍於粧臺憶生書中之語娥眉懶畫雲鬢亂拖口吟二十八字以嘆云

間悶間愁睡起遲　細詳書意苦相思
自知近日多清減　羞對青鸞巧畫眉

未幾值七夕之期是夜風雲清彩星斗交輝道昂設家宴於園葡萄架下邀廷景瑞文□會飲至二更□闌人散□

8、□□酒未醒乃獨步至後園仰視一天星斗徐徐行過英家來至一軒綠檻紅窓欄杆雕曲牖戶人□□賞堪□朱牌黑字上書翡翠軒於英寢室不遠數丈偶聞軒左有人言語生遂躡足向前視之乃是嬋英嬋英手執金針盆盛瓜李以待巧降之意生月下一見嬋英眉如烟籠柳葉面似雨濕桃花生乃近前一揖英忙答禮謂英曰重蒙厚□

〔第九丁、表第一行〕

意攪擾潭府此情銘刻于心當以重報英微笑曰親戚之間何必稱謝不足掛懷生亦笑曰多感辱愛怎不掛懷語言之際二人眉來目去英曰兄長既讀古今書史何不曉此理乎今宵七夕之期備此等物專待黃姑降送巧臨生曰小姐差矣目今牛女一載而得一度相逢休言歡娛之事且訴間濶之情伊愿夜如年猶恨更漏速有何心緒送

〔同丁、裏第一行〕

9、□與人間也豈不聞古今云

時人不用穿針線　那得工夫送巧來

〔同丁?、裏第二行〕

此言非謬如區ヒ今幸一遇小姐恨不能一展衷情英曰兄長欲何言妄當謹聽生正欲用詞以訴之忽楚蓮春桃至與英作辭而退英雖別生尤回顧數次生歸軒如癡如醉恨不得與英一訴情懷鬱ヒ如失乃揮筆便書踏沙行一首以借牛郎織女會散之意而題其詞云

10、有彩燈一架其燈□一

〔第十丁?、表第十行〕

帶二十四條皆瑞化
瑙玻璃眞珠琥珀等
邀道昂瑞文幷妹等
薄全無堪待之物各
刻英出母令逐位行
非蟠桃之酌君見無
聞英語似黃鶯初轉
低聲又得此愛怜之
笑而退席已既終天
快ヒ躊躇存想且英
指又經季春或一日
蓮在側英乃與蓮共

〔同丁?、裏第一行〕

□漸晚衆人皆散生歸軒思英之言
歸臥室爲生脂粉女工卒皆不整撚
英乃倚門納悶似有動靜之意忽楚
話蓮乃巧言挑之於膠密之際英□

11、吁垂頭蓮見英有傷春之心又以前言誘之曰今小姐有
何心事與妾共商議之何故自苦寂莫英乃不言良久乃
援筆寫於揀板上與蓮視之云

〔第十一丁、表第一行〕

每念書生俊俏停針幾度思量袖稍搵淚未常乾對鏡
嬌容日減多自從相逢染病到今尤自無妨終朝廢寢
及忘餐難遇多情空嘆

蓮曰小姐既然慕生如不阻藍橋之路會生不遠何必以致憔悴英曰汝有何計令我會生蓮曰極易耳小姐脩書一緘妾與遞去看生如何英曰倘若他人知覺奈何蓮曰不然且門戶深遠有誰知之英乃自取箋書春殘西江月一首爲緘命蓮寄生蓮得英□達生生得其詞乃覽之云

綠暗紅稀園圃鶯迷蝶□□□柳陰已自罷鞦□殘景
□□留戀倚檻嗟吁遂□□□淒楚無言□□□中寄

〔第十一丁、裏第一行〕

12、英拆緘視之乃一詞也詞名鷓鴣天云

默倚幃屏正慕時遇逢仙客惠新詞花牋巧疊□□□
□字鮮明兎筆書纔展讀魄魂飛恨無青鳥寄相思腰
肢瘦盡衣寬褪未審尊前知不知

〔同丁、裏第五行〕

英覽畢不勝恍惚展轉嗟吁自足彼此之心顧戀之意終

不能生一計

風大惡雨大惡一夜盡把花摧掠釀成愁人索今非昨

13、　春非昨今春一似前春樂腮邊淚落　〔第十二丁?、表第一行〕

一日晚間生因無聊閑行過英家來至後園並無一人交肩良久乃轉步忽聞後有人聲生急回顧乃英也羅帶飄飄金蓮欵欵近前曰獨步無聊知君在此特來共話生與英揖同行出後園止離尺餘而立英謂生曰玆承佳作妾欲與君一會奈無寸地幽僻自從見後終日心意懸懸今

14、　臉堆笑向前拍生之肩而語曰　〔同丁、表第十行〕

也正話間忽有春桃至各不敢言遂別而歸且英到房思生之語怎奈慾火烹心乃喚蓮入謂之曰適來我已見生伊求歡事我許之矣汝意若何蓮曰今日黃道雙全天喜遇留此夕可以成姻矣英遂從之乃寫西江月一首命蓮寄去邀生赴約詞云　〔同丁、裏第一行〕

15、看詞畢二人含笑不已少頃蓮請英取寶馬金錢列於軒〔第十四丁、表第三行〕
內卓上生英對越皇天后土設愿求諸世世生生願爲夫
婦有負心當卽天亡永墮阿鼻不得人身生先書誓疏曰
大元至正十一年五月十六日浙江臨安府錢塘縣擧
人諸葛章生於宦家古今博覽蓋聞混沌初分陰陽配
合生男女之儀成夫婦之倫列綱常之道合天地之心
今淑女嬋英溫良恭敬與章結婚生則同衾死則同穴
心膽俱一倘後薄倖忘棄者伏望神明鑒照進取魂魄
肝膽塗地乞賜聖鑒

16、嬋英亦寫誓疏曰〔同丁、裏第一行〕
妾本姑蘇州守蘭房妾汪氏嬋英守閨門之寸步習針
線之綉工偶逢武林才子諸葛章愿効文君歸相如生
死相守莫似王魁負桂英有始無終專設香燭爲明證
特請直年月日時之功曹東嶽報應之官將作證若有

負心之人不能安享榮華死於橫逆乞神照察

17、染疾在床今福來請公子見面有囑後事生聞福語淚珠流墜欲辭母舅回家道昂曰既令堂患病難以留汝來早送行生曰諾乃歸軒收拾琴劍書箱當夜不寢默坐對燭流淚正思難捨嬋英而歸或聞有人扣戶生出視之乃英蓮也生邀二人入軒英曰聞君令堂尊體少安明日君去欲備一餞恐人衆言今備草酌聊將遠送之敬生稱謝曰適來韓福言母病呼喚小生欲歸難捨小姐欲未歸有違母親英曰君言大不然也豈不聞聖人云養生者不足以當大事惟送死可以爲大事此人子之道父母思如山海今病在危急呼君面見必有所囑豈有不歸之理君今戀妾負親豈爲人也妾所慮者恐君異日棄舊怜新一旦拋却使妾何如倘果負妾妾當盡死此是君殺妾也妾於九泉之下亦不饒君桂英活捉王魁正謂此也英言一句淚下千行生挽英手以衫袖爲英拭淚生亦泣曰吾非薄倖

〔第十五丁、表第五行〕

〔同丁、裏第一行〕

18、江未已又曰君今□　〔第十六丁?、表第十一行〕

佳音以報平安生曰然　〔同丁?、裏第一行〕

英乃辭生掩淚而行

步軒將近矣英乃掩

珍重生乃作別而歸

房中靜悄心益悲切

夜啼詞一首及七寶

緘覽其詞

妾有七寶釵兩隻

獨向蘭房暗追憶

潸潸似雨沾胷臆

信息忽遣沈雙鯉

19、逝水流光何疾速　〔第十七丁、表第一行〕

重起披衣剪殘燭

盼得何日再成雙
生將詞釵藏於箱內少
行生困愁苦不能飲酒
氏李氏但答相送生□
遠送留戀不捨珠淚偸拭
生投孤店不能寢寐取英金釵幷
明皎皎蛩吟切切恨不見英乃作滿
鴈宿平莎鴉棲叢樹一輪金鏡西沈忙投
孤衾蹙損双眉不語極目看秋葉紛ヒ透紗牕
照此際甚淒清玉人應不見淚落紛ヒ滿懷心事怪
隔籬促織夢難成況黃燈殘香盡情默ヒ坐踰三更轉
尋思全然不寢開眼到天明
次日生登程迢遞往武林至家中有妾迎生至臥室生拜
母畢曰不孝男有夫奉養罪若丘山母曰汝離家去韓福
不安今得見汝死亦瞑目次問道
待之恩大小清吉稟知母親自生

〔同丁、裏第一行〕

坐臥未常忘英因而慽ヒ瘦損書

20、

□□使不能伸其間闊□苦英亦自
□臨頭蓬面垢飲食□□盼生消息
英謂蓮曰瑞文去久絶無信息必負

〔同丁?、裏第九行〕

21、

寸心戚ヒ如癡如醉片懷鬱ヒ似
顚似狂淚眼昏ヒ傍寒窓而仰慕神魂渺ヒ守孤室以
追思適蒙華翰詞知清吉忻忻惆ヒ本欲作柬整訴離
別之苦奈來使回促聊伸間闊之情他日面晤自當謝
愆相逢之日料在春光荏苒草木芳菲匆匆無以爲□
辰下一陽將復萬冀自重就書拜上楚蓮小姐不及□
英讀畢一悲一喜謂蓮曰久無音信恐瑞文薄倖今觀此

〔第十八丁?、裏第五行〕

22、

書不負我也蓮曰瑞文平昔恂ヒ非薄倖者也□□□□
經一年生別母往京英聞生來與蓮喜不自勝不日生至

〔第十九丁、表第一行〕

先見母舅叙寒溫良久及見廷景李氏詢問已畢少頃李氏喚英出見英方晝寢未知生到蓮乃向榻言於英曰瑞文至矣英方醒慌忙語蓮曰汝勿戲我俄頃春桃曰諸葛生至堂令小姐出見英聞母喚不勝之喜遂淺粧淡服緩步出與生見禮畢侍立母側生見英貌清瘦悲喜良久生退館於軒當夜更深英與蓮迎生入閨並肩而坐英曰郎君途路風霜別來許久妾自君去終日懸ヒ胡或回蒙賜翰墨今果不負鄙陋生曰別離之苦非一言可盡今得再會此緣非淺將前七寶釵交還與英曰我與汝團圓勿令釵之孤獨也英笑而收之生取金釧花釵一雙細翠一副與英ヒ將五彩絨香囊酬之頃刻夜深垂帳展衾共臥於牙床珊枕桃腮並於杏臉香肌抱於酥胸歡娛未足離情又到東方既白生辭去即日晚又至英室以銀環一雙金簪一對與蓮宿至天明而去自此生至英閨歡會非止於白日亦如此一日同英坐於臥榻之上閑話春桃偶至生其意遂將此事白於英母母曰吾

〔同丁、裏第一行〕

〔第二十丁?、表第一行〕

23、且英歸室之後悶ヒ
倦整忽一日夜間獨
形容伏枕而臥忽有
兀坐幽閨忽然蟋
誰語自把圍棋逐
情話淚垂如雨伏
愁復起鼓打三撾
自歎衾寒幾時
兩箇愁濃悶疊遂□

〔第二十丁?、裏第二行〕

24、就把此女匹配但不第再不讓上門□□□羞漸不已□
日後生密譴□言曰煩望再三致意小姐吾來日往京若
不見棄今□□軒一會足見平昔之情蓮以此言白英英
聞生去不勝苦切備酒臬當夜往□軒生知英至遠迎入
室生曰我來日往京相會不知何日英曰君前程萬里無

以妾爲慮今備小酌以餞此去君當名標虎榜獨占鰲頭
章壹柳忘却舊時情休負寸心悞妾終身語未畢珠淚亂
墜生亦泣曰當領金石之言刻於肺腑又曰子休多苦吾
倘榮顯敢忘舊恩又曰今宵共宿若何英諾乃命蓮歸二
人同衾共枕且歡且苦至旦鼓英曰妾非不□與君至曉

25、

別離歌第四聲

〔第二十一丁?、表第一行〕

□手曰君既心意堅固妾死無怨乃
本生遠念憶秦娥詞以與生其詞曰
心言說心言說許多情緒無休歇□
□血有似春花落紅雪曉來飛墜醉
不知何日相會生曰路雖遙遠小姐

26、

〔同丁、裏第一行〕

蘭非等閑之□收□女爲兒婦吾謹領之容吾往虎丘山
下一卜卽當送吉帖恁伊裁處媒氏拜辭以汪宅之言曰

子蘭吾曉其家雖富奈愚蠢村夫吾雖許你意若何英母曰愿夫自主張楚蓮在側曰小姐巫山之仙女豈配村中之稚子玆者妾聞母親已將小姐許諸葛生爲妻今何故又許他人耶母謂夫曰我見瑞文資質出衆宦家之子況是擧人妾當自嘆嬋英可爲配也故有此說英父曰我意每欲如此英母又曰夫心卽如此妾當實告向日妾以英許生耳父作色曰若非楚蓮顯負於書生正所謂車無軌人無信行成何以

〔第二十二丁?、表第一行〕

27、不可妄動恐外知之論我待求官向日再處當有他事而散蓮至英室以言陳英英聞父肯配生乃生動顏色再四謝蓮生去忽經二月餘但覺花稀葉茂蜂慵蝶困日影遲遲倦人天氣英想與生共衾之樂今各一方又恨信音杳杳忽聞畫角聲悲乃揮筆掃成錦堂春一闋以遣興

城上梅花三弄樓頭新月如鈎悶對浮雲無復有惹起悠悠錦城書□□□□□自是心疑莫非別戀嫩花

28、　書報無物爲寄量弗責我耶草次欠恭伏惟尊盛
衆聞生及第喜不自勝近日事情來人備陳道昂賜酒食
留宿於家當晚英知生有信命楚蓮問消息吳郡曰娘子
莫非楚蓮乎蓮曰然也吳郡曰小人之主諸葛狀元有書
奉此蓮得生書辭謝人以書達英英得書暗稱慚愧而視
其書云　　章拜覆奉上
嬋英可人粧次自窓前握手一別於孤館愁悶千端光
陰荏苒屈指算期頓逾經年恨山遙水遠不能一面夢
寢之中念念心心未嘗少忘每盼音容嬌態淚有千行
腸成百結度日如三多過宿如一載區區托庇今幸登
第奈乎未得御筆親除權館待選今特馳書報知恕情

〔第二十三丁、表第一行〕

29、　免慮相會之期料在黃桂吐香碧梧飄葉向希不備幸
甚電覽
英覽畢喜不自勝亦修一書遣蓮送來人復寄與生次田

〔同丁、裏第一行〕

30、翠光陰迅速有如是夫數金釵暗記首尾倏經三月奈何藍橋水阻而燕朋鶯友各東西彩鳳文鸞皆南北一季不同衾枕半刻何嘗寢寐正仰間忽蒙華翰飛墜不勝雀躍用伸忻慰今因人便草草奉覆悶中吟得五言詩一律就書呈上詩云

〔同丁?、裏第七行〕

31、淚濕鮫綃帕　腰寬翡翠裙
鏡塵慵拂拭　脂粉懶施均
暗把金錢卜　頻將寶篆焚
忽承書報捷　恭喜躡青雲

〔第二十四丁?、表第一行〕

朝廷選生福建省大參生辭朝回至蘇州道昴廷景出長亭迎至家中敍問畢衆皆忻賀道昴置酒傳盃弄斝酒已大醺生仍館於翡翠軒是夜月朗風清英蓮召生戶外良久生因沈醉不能往英蓮自回次日晚英謂蓮曰瑞文今日天祿高遷我召不至意必負我也早知薄倖悞我終身

長嘆數聲淚珠盈腮方欲撫枕而臥蓮曰小姐勿性燥也待妾明日見生自有言說看伊何爲正話間忽聞有人扣

23、鵲天詞以別　〔同丁?、裏第九行〕

握手臨岐別恨深舊悲新怨兩關□秋風蕭瑟催分袂砧杵叮咚隔院鳴心慘慘淚淋淋□惶不忍向前行□

33、飡夜則廢寢看書奉覽□□愚生諸篇□□□□□　〔第二十五丁?、表第一行〕

嬋英小姐粧次自別後倏經數月思仰淑體納□納吉區區爲忻爲慰緣淺分薄難再一會晨思夕想不能縮地至粧臺左右所恨者咫尺如隔千里使區區病染沈痾身將廢痿如此之苦小姐皆未知也寢食之間行立之際未嘗一刻有忘聊奉數字吐露離情伏惟見怜□一乞示回音無物奉敬錄得楊柳枝一首呈覽

三

次に私が『翡翠軒』の殘葉をこのように並べ變えた理由をストーリーを追いながら説明する。特に？マークを付けた丁數の不明な殘葉についての説明に重點を置く。

1、これを第一丁裏と判斷したについては、まず登場人物から説明しなければならない。この小説の主人公は15に見える錢塘縣の擧人諸葛章、字は瑞文と、16に見える蘇州太守の娘汪嬋英である。瑞文には母舅（母の兄弟）道昂がいる。道昂（姓不明）が瑞文の母舅だとわかるのは、17の「欲辭母舅回家、道昂曰、既令堂患病、難以留汝」と、22の「生至、先見母舅叙寒溫、良久及見廷景、李氏」によってである。道昂の妻には兄汪廷景があり、その娘が嬋英である。2には「汪廷景……請甥并妹與道昂」とあり、汪廷景も瑞文を甥と呼んでいる。ところで1の「留甥館於芙蓉軒」の主語は道昂であろう。2の「道昂□京赴試新到」の語から、道昂は應試のために妻兄の邸内に居を構えているようだ。瑞文はその母舅に隨行して來たものであろう。1には瑞文の書齋芙蓉軒には、「兩壁掛美人□□□」という。瑞文はこの美人畫に詩を題したと思われる。その詩が2の七言絶句であろう。「其四幅、弄花香滿衣」から、美人畫は四幅あったことがわかり、第一幅の詩題は今缺けているが、第二丁第二行にあったはずである。また1は2のすぐ前に來るべきものであるから、第一丁裏葉と判斷した。なお主人公が場面ごとに詩を詠じるのが文言戀愛小説の特徴である。

2、丁數明記。阿英は嬋英を舅の娘と記しているが、舅の義兄の娘である。汪廷景は、「妹之親、卽吾親也。勿以

外人相待」といって道昂、瑞文を家屬としてもてなし、そこで瑞文と嬋英は兄妹として接する。

3、丁數不明。瑞文、嬋英の侍女楚蓮から嬋英に婚約者がいないこと、嬋英が牡丹の花のように氣高く近づきがたいことを聞き、紈扇に描かれた牡丹に詩を題する。蓮英はその詩を見て瑞文が自分に好意を懷いていることを知る。この小説で扇に詩を題するシーンはここだけ。またストーリーの進行から見て、この半葉は瑞文が嬋英に戀文を渡す4、5の前にあるのが自然である。阿英はこの3を11の後に續くと考えたらしいが妥當ではない。

4、3で嬋英に婚約者がいないと知った瑞文は、嬋英への戀文を侍女楚蓮に託す。ここは丁數は不明であるが、5の第七丁表がこれにすぐ續くことから、第六丁裏と考えられる。3はそれで第三丁から第五丁までいずれかの裏葉ということになる。

5、瑞文の依賴を受けた楚蓮は、まず男女の戀愛が自然であることを說き嬋英の心を柔らげようとするが、嬋英は愼重論を說く。

6、瑞文の戀文を讀んだ嬋英は、怒って楚蓮を叱りつける。

7、嬋英はなお瑞文の戀文を破る。驚いた楚蓮はこれを瑞文に報告する。嬋英、瑞文の書中の語を憶い、嘆息する。七夕の日、道昂は宴を設け廷景と瑞文を招く。

8、宴會の後瑞文は裏庭を歩き嬋英の家へ向かうと、翡翠軒で巧を乞う嬋英に出會う。瑞文は牽牛織女の故事を語る。なお阿英は「時嬋英正以金盆乞巧」と記すが、原文は「嬋英手執金針、盆盛瓜李、以待巧降之意」であり、明らかに誤讀している。

9、第一行の「□與人間也」は8の末行の「有何心緒送」に續く。（□には「巧」字が入るのであろうが、讀み取れない。）よって9は第九丁裏と判明する。8に引き續き、瑞文はこの機會に嬋英に胸中を打明けようと思うが、侍女たちの到來によって妨げられる。

10、11の第一行「吁垂頭。蓮見英有傷春之心」は、10の末行「英乃與蓮共話。蓮乃巧言挑之。於膠密之際、英□」に續くようだ。空字は「嗟」か。とすれば、11は第十一丁表であるから、10は第十丁ということになる。七夕からまた時が經過して翌年の元宵、汪廷景が道昂夫妻と瑞文を招待し、席上嬋英は母命によって瑞文に酒を酌む。晩春のある日、嬋英は物思いに耽り門に倚りかかっていると、楚蓮がやって來て嬋英の心を探る。なお10は上下二片から成るが、北京圖書館藏本は下片を18の下段に貼っている。

11、10に續き、この時嬋英は終に楚蓮に向かって瑞文への思いを語る。楚蓮は嬋英に戀文を書かせ、それを瑞文に渡す。なお第一行の「蓮……又以前言誘之」の前言とは、5に見えることを指すのであろう。

12、丁數は不明であるが、鷓鴣天詞の第二句「遇逢仙客惠新詞」から、この詞は11の嬋英の西江月詞への返詞だとわかる。嬋英はこの詞を讀んで恍惚とする。

13、12の末行の詞は詞名が記されていないが、長相思詞の一部であり、藥鐸韻を用いている。13はこの長相思詞の後半から始まる。男女二人は再び裏庭で出會う。この時嬋英は瑞文の返詞の禮をいい、逢瀨が遂げられない恨みを瑞文に打明ける。

14、第十二丁の表第十行から始まる。嬋英は瑞文と親しく語らった後、楚蓮と相談してその晩瑞文と情交すること

に決める。この段は13にすぐ續くようであり、とすれば13は第十二丁表、12は第十一丁裏となる。

15、一葉余り飛んで第十四丁表。第一行の「看詞畢、二人含笑不已」は前葉を缺くので意味不明。男女は翡翠軒で天神地神に向かつて夫婦となる願を立てる。そして瑞文が先に誓詞を書く。

16、續いて嬋英が誓詞を書く。なお阿英は二人が月に向かつて誓を宣べると記すが、誤り。

17、16から九行飛んで、第十五丁。瑞文の家の下男が杭州の母の病氣を傳えに來る。嬋英は歸宅を促すが、自分を裏切らないようにと釘を刺し、瑞文も裏切らないと約束する。

18、別れに臨んで嬋英、瑞文に詞と七寶釵を贈る。下半葉を缺くので明確なことはわからないが、第七行の「夜啼詞」とは烏夜啼詞のことか。

19、第十七丁表第一行から始まり、第三行までは嬋英の詞のようである。よつて18は第十六丁と判定できよう。瑞文はこの詞と釵を受取り、送別の宴の後、故郷へ向けて出發する。杭州に着いた瑞文は母の病氣を伺うが、片時も嬋英のことが忘れられない。第九行は「滿」字以下を缺くが、次に續く詞は滿庭芳詞である。

20、わずか三行だけ殘っているが、上半分を缺くこととといい、敍述內容といい、19の第十七丁裏の一部と判定できる。瑞文は嬋英と別れて遣瀨なかったが、嬋英の方も窶れ果て、瑞文から消息がないので浮氣をしたのではないかと疑う。

21、瑞文が嬋英にあてた書信。第三行に「適蒙華翰」とあることから、返書だということがわかる。ここは裏葉であるから、散佚した第十八丁の表葉には、嬋英が楚蓮と相談して瑞文に書信を送ったことが書かれていたに違い

ない。

22、第十九丁表。第一行「書、不負我也」は、21末行「今觀此」に續く。一年後瑞文は母と別れて上京する。道昂、汪廷景、李氏、嬋英との挨拶を濟ませて館に退き、その晩男女は衾を共にする。以後二人の密會は續くが、次第に大膽になって白日でも情事を行なったため、李氏の侍女に見つかり通報される。

23、第二十丁表か。22は第十九丁裏の後四行が缺けているが、想像するに侍女の通報を受けた李氏が實際に現場に赴いて二人の情事を確認し、二人を叱りつけることが書かれていたのであろう。ここでは叱られた嬋英の心情を記したものか。その詞の末句に「自嘆衾寒幾時」とあるから、二人は謹慎を言い渡されたようだ。末行の「兩箇」とは嬋英と楚蓮か。

24、第一行から、二人の情事を目擊したと思われる李氏が、怒氣を含んだ口調で、瑞文に科擧及第を條件に娘との結婚を許していることが讀み取れる。故にここは第二十丁裏と考えることができよう。男女は別離に臨んで一夜を共にする。

25、末行を讀んでここに位置づけたが、ただ第一行の「別離歌第四聲」は24の末行と續かないようにも思える。待考。一應24に引き續いて別離の場面としておく。

26、第二十一丁裏。瑞文の上京中、汪廷章は嬋英を富家の子弟子蘭の妻にと考え話を進めるが、楚蓮と李氏から李氏がすでに瑞文との結婚を許したと聞き、それに贊成する。第一行「以汪宅之言」は意味不明、誤刻か。

27、第二十二丁表であろう。第一行には富家との緣談を應諾した手前、瑞文との緣談を表沙汰にするなという汪廷

章の言が記されている。楚蓮は事の成就を嬋英に傳える。それから二月餘過ぎるが瑞文からの消息はない。阿英は瑞文の歸鄉中に嬋英に他家との緣談が起こると記しているが、正しくは瑞文の上京中のことであり、また他家との緣談は女が拒絶して成立しなかったのだろうと推測しているが、これも實は女の父が瑞文との結婚に贊成していたためであり、阿英の推測は誤っている。

28、第二十三丁表。道昂の許へ狀元及第を知らせる瑞文の書信が届く。瑞文の信は末行のみを殘し、前は缺けているが、缺けた部分は第二十二丁裏に記されていたであろう。瑞文はまた下男吳郡に嬋英への書信を託していた。

29、第二十三丁裏。第一行「免慮」は28末行「恕情」に續く。嬋英は返書を吳郡に託す。

30、嬋英のその返書、冒頭を缺く。

31、冒頭の詩は30の嬋英の書信中に言う五言律詩であり、ここは第二十四丁表に當たる。瑞文は福建省大參に選ばれ蘇州へ戻ると、道昂と廷景の出迎えを受ける。その晩瑞文は祝宴で泥醉して嬋英の許へ赴かず、嬋英は男に捨てられたかと嘆く。なお第七行に「生仍館於翡翠軒」というが、瑞文はいつ芙蓉軒から翡翠軒に移ったのであろうか。翡翠は芙蓉の誤りのように思える。

32、その後ストーリーは瑞文と嬋英の結婚へと進展してゆくのであろう。33の瑞文の書信に「納□納吉、區區爲忻爲慰」というから、二人の婚禮が順調に進んでいることがわかる。32は瑞文が婚禮のために再度歸鄉しなければならなくなったのであろうか、別離に際して鷓鴣天詞を詠んだ場面。

33、瑞文が嬋英にあてた書信。『翡翠軒』はここまでしかストーリーが把握できない。

四

以上殘片を整理分析してみたが、これをもって阿英の梗概を覗ると、かなり粗雜であり、いかにも讀後の記憶を辿って書いたという態である。また北京圖書館藏原本は私の付けた殘片番號でいうと、2、13、10上、18・10下、5、1、27、6、7、8、12、11、14、20、15、16、17、19、22、26、28、29、30、3、24、23、21、25、4、33、32、9、31の順に並べており、殘片を未整理のまま貼り付けて書にしたものといえる。この殘片は、阿英によって發見されたものの、阿英自身も「この殘片を得たことは嬉しかったが、同時に失望も感じた。『梅杏爭春』は五片しか殘っておらず、また『翡翠軒』も傑作ではなく、『巫山艶史』のような文言才情小說に過ぎないからである」と述べるように、この作品は文學的價値の低さから、以後も顧みられなかったと考えられる。譚正璧は斷簡零墨のため原文の登載を斷念し、ただ阿英の紹介文だけを轉載している。(3) 私も殘片を見る限り叙述に緊張が見られず、決して佳品とは言い難いと感じている。しかし本作品が『清平山堂話本』の一種であることから肯てその全文をここに紹介し以後の研究に資することにしたものである。本論はここで終わるが、ついでながら阿英は『梅杏爭春』殘片についても似た過ちを犯しているので指摘しておく。阿英の說明はこうである。

『梅杏爭春』は五枚しか殘存していない。內二枚は一頁として續き、別の一枚は文を成していない。頁數から見ると、すべて第三、四、五頁中の殘片である。

阿英はこの說明の後に抄錄した原文を、殘片一、二、三として載せ、文を成さない他の一枚についてもその字句

を記し、「やはり梅嬌と杏俏が梅と杏について論爭することであり、郡王の前に喚び出される以前の文である」と説明している。

だが實際には殘片一は第三丁裏、殘片二は第五丁表、殘片三は丁數不明の裏と表であり、また殘片一には郡王の侍女梅嬌杏俏二人が裏庭に遊び、杏俏が杏花の美を稱えること、殘片二には杏俏が古人の杏花詞を詠むと梅嬌と言い爭いになり、郡王の許へ喚び出されること、殘片三には郡王の命令で二女が詞賦を競うことがそれぞれ述べられていてストーリーが續くことからすると、殘片三は第五丁裏と第六丁表だと判定できる。文を成さない一片については、「這梅花多有吟詠」「梅花好處」という句とその後の詞（？）から、梅嬌が梅花を詠んだ古人の詞を吟じたものとわかるが、第何丁の裏なのかわからない。よって阿英の「すべて第三、四、五頁中の殘片である」という説明は誤っている。

また原文の抄錄にもミスがあるのでこれも記しておく。

殘片一、「百花競放、百蕊爭開」の百は萬、「尋香粉蝶翩翩舞、釀蜜游蜂隊隊飛」の翩翩、隊隊はそれぞれ翻翻、對對の誤。

殘片二、「我曾記得」の記は認、「紅杏枝頭春意鬧」の意は雨の誤。

殘片三、「杏花不如梅花清幽淡泊」の如は及、「雲天分外精神」の雲は雪、「別是一家春」の是は具の誤。「窻畔臨風對舞、」は「明窻畔、臨風對舞、」の誤。

註

（1）阿英『小説閒談』（一九五八年、上海古典文学出版社）「記嘉靖本翡翠軒及梅杏爭春」による。以下阿英の記述はすべてこの一文によった。

（2）明嘉靖間晁瑮撰『晁氏寶文堂書目』には『翡翠軒記』に作る。

（3）譚正璧校注『清平山堂話本』（一九五七年、上海古典文学出版社）